

菊の文化、刀の文化

武士道協会 副理事長

渡部昇一
わたなべしやういち

失われた「刀」

ルース・ベネディクトというアメリカの女性の人類学者が書いた『菊と刀』という本が戦後の日本で大きな評判になった。彼女は日本に調査のために来たことがないのに、日本人についての秀れた文化論を書いたというので日本人を驚かせたのである。彼女は各文化の様式に関心があって、日本の文化の型は平和的・女性的な「菊」で象徴される理想と、武断的・男性的な「刀」で象徴される理想の二つを持つという主旨のことを述べた。確かに日本には平安文化という世界に冠たる優

美な、女性的な文化の時代もあったし、鎌倉時代以降、武士という戦士の生き方を核とする文化の時代が続いた。なるほど日本の文化は、「菊」と「刀」という両面のある文化であると納得し易い。しかし昭和二十年の夏以後の日本においては、「刀」の文化を徹底的に根こそぎにしようという占領政策が行なわれた。アメリカ軍の日本進駐は、当初、二十五年か五十年ぐらい続くのではないかと予測もあった。新憲法の第九条は「国防軍を日本は持たない」という内容のものである。永世局外中立国であるスイスさえ重武装の国民皆兵を前提とした国家であることを考えると、日本のよ

うな「大国」が国軍を持たない主旨の憲法を持たされたというとは異様なことである。しかし新憲法ができた頃は、アメリカ軍が日本全土を軍事的に支配し続けるという建前であったから、日本人が国防のことを考える必要もなかったし、また考えてもいけなかった。

そして日本の武士の魂、軍人の魂とされた「刀」は進駐軍の命令ということによって集められ、美術的価値のあるものとして許可されたもの以外は所有を禁じられた。このため廃棄された刀は数百万本になるといふ説もある。本当の数は解らないが、膨大な数の刀が消滅した。そして刀と共に文化の型としての「刀」も消え、刀の象徴する武士

道精神も消えてしまった。かえって台湾の心ある人、たとえば李登輝さんなどによって、「日本人よ、武士道精神を取りもどせ」と叱られているような有様である。

「徳」の本質

では武士道精神とは何か、と簡単に言えば戦士の精神と言えよう。その内容について、私は今から三十年以上も前に、哲学者の田中美知太郎先生に「徳」を意味するラテン語の *virtus* (英語の *virtue*) の語源的解釈から説明していただいたことがある。

徳、勇氣、道義、力などを意味するラテン語 *virtus* は「男」を意味する *vir* から作られた単語である。つまり「徳」というのは「男らしさ」ということから派生した言葉であった。

では「男らしさ」の精華である「徳」の本質とは何であろうか。田中先生は「自分の生命を越える価値を認め、必要とあらばそのために命を捧げることができること」であると語られた。自分の



▲わたなべしやういち
1930年、山形県生まれ。'55年、上智大学大学院修士課程修了。ドイツ、イギリスに留学後、母校で教鞭をとる。2001年、上智大学名誉教授に就任。専門の英語学以外に、歴史、哲学、人生論など、著述・評論ジャンルは幅広い。近著に『日本人ならこう考える』(養老孟司氏との共著/PHP研究所)などがある。



生命以上の価値を認めるには、教育が必要であり、修養・内省が必要であり、最終的には勇氣が必要である。日本には極度に洗練された美の文化があったと同時に、この徳の文化も極度に発達していた。この徳の文化を日本では武士道と言ひ、西洋では騎士道と言った。外形としては違っているところがあつても底に通ずるものがあつた。

日清・日露戦争を見ると、敗れた敵将に対しては、「昨日の敵は今日の友」という徳が生きていた。自分も敵も、個人の怨ではなく、国に対する義務のためだつたという認識があつたからである。清国の丁汝昌もロシアのステッセルも敗軍の将として鄭重に扱われた。

残念なことにアメリカには騎士道がなかつた。中世を知らぬアメリカ人にとつて、戦う相手はアメリカ先住民にしろ、フィリピン人にしろ、日本人にしろ単なる憎むべき敵であつた。マッカーサーには自分をフィリピンから追い落とした本間雅晴將軍や、絶対不利の状況で終戦まで戦い抜いた山下奉文將軍らに対し、「敵ながら天晴れ」という

騎士的発想法はなく、戦犯として簡単に処刑した。占領軍であつたアメリカは、日本の「刀の文化」をひたすら怖れ、警戒し、これを恥ずべきものとして日本人の心に植えつける政策を組織的行なつた。この洗脳工作は戦後、公職追放令によつて生じた教育界や言論界の空席を埋めることになつた反目的左翼文化人や学者によつて受けつがれ、その結果として日本の「刀の文化」の伝統、すなわち武士道の精神は、教育の場で教えられることも稀になり、それを嫌悪する風潮さえ産み出してきているのである。

菊の文化も大切だ。しかし刀の文化、武士道はそれに勝るとも劣らない文化の伝統である。日本の刀の文化がなかつたならば、二十世紀の初頭に全世界は白人支配の地となり、有色人種は白人の使用人か奴隷になるより仕方がなかつたのである。しかも日本の刀は、美術品としても最高の座を占めるものであつた。菊と刀は日本文化の両面であり、菊一文字の刀に象徴されるように一致するものでもあるのだ。